

主なる神に仕えよ

詩篇 100:1-5

2021. 10. 3(神無月)丘上 NO. 666

春日部福音自由教会 山田豊

早いもので10月、日本のこよみでは、神様のおられない神無月となりました。しかし今朝は、共にいてくださる神様にお仕えすることの幸いを、詩篇100篇から心に留めてまいりましょう。

1-2節では、喜びの声をあげて主なる神を賛美せよ、と命じられています。

「歌いつつ」とあるように、神殿での礼拝に音楽は欠かせませんでした。教会だけではありませんが、いろいろな種類の音楽の演奏、舞台などが大きく制約を受ける時が長く続きました。もうじき、このようなことから解放されて、神様が与えてくださった音楽という賜物、神を高らかに賛美することができるようになるでしょう。2節には「主に仕えよ」とありますから、これも歌を歌うように、喜んで主なる神様に仕えることを命じている言葉です。同じ福音自由教会のI牧師のお父さんが召され、告別式が営まれました。お父様の名まえは従男と書いて、きくお、と読みます。神様に聞き従うようにという意味でしょうが、I牧師のお父様は、「自分は軍隊生活を送ったので神に従う、お仕えすることはよくわかる」と言われたそうです。イエス様が父なる神様に従う道を最後まで全うされたように、私たちも主なる神に仕え、他の人に仕える道を全うしたいと思います。全地よ、と呼びかけられているように、私たちの全生活領域で神様に仕え、またすべての人たちが、この主の言葉に聞いていただきたいと願っています。

3-4節には、私たちは主のものである、そのことが、羊が牧場の中に移行たとえで歌われています。日本には野生の羊がおらず、馬の牧場を観ることはあっても、羊の牧場はあまり見ることはありません。旧約聖書にも、人間は羊に例えられています。イエス様のたとえ話にも、失われた迷子の羊の話があり、その一匹を探して救い出す羊飼いが、イエス様を表すものとなっています。迷いやすい羊は、牧場にいるときにこそ、安全安心でいられるのです。ですからここで、「神の大庭に入れ」と言われているのです。教会に集い、聖書を学んでいても、イエス様を信じるのがなければ、劇場の外を巡っているだけで中に入らないようなものです。上演されている劇を楽しむことはできません。イエスを信じ、牧場である神の大庭にはいる時、イエス様の命をいただき、祝福された人生を送ることができるのです。

5節には、主なる神は慈しみ深い方であり、神様の恵み、真実は代々に至ると歌われています。もじどおり、「子々孫々永宝」を味わうことができるのです。神様に仕える喜びを、味わっていきたいですね。

マルコ 10:45 人の子も、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのです。」

引用聖句(いのちのことば社新改訳聖書 2017)

コロサイ 1:24 今、私は、あなたがたのために受ける苦しみを喜びとしています。私は、キリストのからだ、すなわち教会のために、自分の身をもって、キリストの苦しみの欠けたところを満たしているのです。

ヘブル 11:13 これらの人たちはみな、信仰の人として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるか遠くにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり、寄留者であることを告白していました。

マタイ 7:13 狭い門から入りなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広く、そこから入って行く者が多いのです。

ルカ 13:2 イエスは彼らに言われた。「そのガリラヤ人たちは、そのような災難にあったのだから、ほかのすべてのガリラヤ人よりも罪深い人たちだったと思いますか。」

出エ 20:6 わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施すからである。

申命記 5:10 わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施すからである。

詩篇 105:8 主はご自分の契約をとこしえに覚えておられる。命じられたみことばを千代までも。

エレミヤ 32:18 あなたは、恵みを千代にまで施し、父たちの咎をその後の子らの懐に報いる方、大いなる力強い神、その名は万軍の【主】。

マルコ 10:45 人の子も、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのです。」

天路歷程

Part I (1678年)正篇、Part II (1684年)続篇)は、イギリスのジョン・バニヤン(バンヤン、バニヤンとも)による寓意物語。

プロテスタント世界で最も多く読まれた宗教書とされ、特にアメリカへ移住したピューリタンへ与えた影響は『若草物語』にも見える。

“City of Destruction”(「破滅の町」)に住んでいた Christian(クリスチャン、基督者)という男が、「虚栄の市」や破壊者アポロンとの死闘など様々な困難を通り抜けて、「天の都」にたどり着くまでの旅の記録の体裁をとっている。

この旅はキリスト者が人生において経験する葛藤や苦難、そして理想的なキリスト者の姿へと近づいていくその過程を寓意したものであり、登場人物や場所の名前、性質などは、それらのキリスト教的な人生観・世界観に基づくものになっている。

(ウキペディアより)